大石　学

東京学芸大学名誉教授
静岡市歴史博物館館長

近年、江戸時代のイメージが大きく変わりつつある。それは、明治維新＝文明開化以前の抑圧的支配のもとの未開でミゼラブルな社会から、250年以上続く世界史上でも稀な長期の「平和」（「徳川の平和（パックス・トクガワーナ）」）を実現し、今日、和風・日本風などといわれる個性豊かな「江戸文明」を作り出した社会への変化である。これは、1世紀以上に及ぶ戦国時代の「力の論理」を克服し、合理的・官僚的なシステムを整備し「法の論理」を浸透させることによって実現した貴重な歴史的成果であった。前政権の豊臣秀吉の2度にわたる朝鮮侵攻の戦後処理を短期間で達成したことも見逃せない。今日、ロシアとウクライナ、イスラエルとパレスチナなどの戦争・紛争や、東アジアの周辺諸国との緊張を見るにつけ、「平和」「秩序」の大切さを認識させられる。江戸初期、幕府はこれらを迅速に達成したのである。

江戸の「平和」と「文明」は、同時代にヨーロッパを出立し、世界各地を見て極東（ファーイースト）の島国日本に到達した外国人たちにも高く評価されていた。幕末期に来日したフランス公使レオン・ロッシュは、14代将軍徳川家茂（いえもち）宛ての上書で、「二百五十年の間、国内泰平にして目に干戈（かん）を見さるの洪福（こうふく）を保てるは、世界に聞（きき）たる例なき所なり」（『匏庵（ほうあん）遺稿』）と、長期間武器を使わない社会を讃えている。江戸庶民も落書（らくしょ）・川柳などで、「泰平の　武者は五月に　出るばかり」、「名将も　勇士もしれぬ　ありがたさ」、「太平の　矢挟間（やざま）は風も　ぬけるなり」と、「徳川の平和」を自覚している。

この「徳川の平和」は「江戸の教育」と強く結びついていた。三代将軍家光の時代に成立した三浦浄心『慶長見聞集』の「童子あまねく手習ふ事」の項には、「廿四五年以前迄、諸国におゐて弓矢をとり治世ならず、是によつて其時代の人達は、手ならふ事やすからず、故に物書人はまれにありて、かゝぬ人多かりしに、今は国治（おさま）り天下太平なれば、高きもいやしきも皆物を書（かき）たまへり、尤も筆道は是諸学のもとゝいへるなれば、誰か此道を学ばざらんや」（『江戸叢書』）と、《戦乱の時代、人々は手習いができず

巻頭言

江戸の庶民教育とリテラシー

字を書く人は少なかったが、今は「平和」になり身分を超えて皆が字を書くようになった、文字は諸学の基礎なので皆が学んでいる》とある。誇張された表現もあるが、「平和」と「教育」の関係を鋭く指摘している。「徳川の平和」は、「教育」によるリテラシー向上や社会の「文明化」と深く関わっていたのである。

さて、江戸のリテラシー向上が「ユーモア」や「笑い」を伴っていたことも見逃せない。従来、時代劇の江戸庶民は、多くが読み書きができない存在として描かれてきた。しかし、三浦浄心が指摘したように、人々は主体的に学ぶようになっていた。「平和」のもと江戸社会は幕府や藩の高札・触（ふれ）、庶民の訴願・届出、証文、記録、日記、書状、看板、引札（ひきふだ）（ちらし）、読売、番付、絵図、草紙などに見られる文字化・ペーパー化・情報化社会へと展開したのである。

庶民は、こうした社会のリテラシーの高さを落書などで、「国の母　生れた文を　抱（だき）あるき」「通りぬけ　無用で通り　抜けが知れ」「川止（とめ）に　手にはを直す　旅日記」（推敲）、「引札（広告配り）は　指をなめなめ　斜（はす）に来る」（長屋のポスティング）、「うたゝ寝の　顔へ一冊　屋根を葺き」など、ユーモアとともに表現している。文字は家庭や市中に溢れていたのである。

ユーモアは、歴史情報にも及んだ。「物語　書く頃はまだ　藤式部」「清盛の　医者は裸で脈をとり」、「口へんに　そら音で関を　とをりぬけ」（啌（しかる）と嘘（うそ））、「国家安全と　書かぬが　落度なり」（大坂の陣）、「目かくしと　かくれんぼする　由良と吉良」（忠臣蔵）、「古池の　ぽちゃんが末世　迄ひゞき」（芭蕉）、「膝栗毛　はねて一九は　おちをとり」「一ト村を　粋（すい）にして立つ村芝居」など、庶民の歴史・古典リテラシーの高さがうかがえる。庶民は「徳川の平和」のもと、歌舞伎・文楽・講談・黄表紙などの芸能や出版、旅や銭湯・井戸端などの会話により主体的に知識や教養を修得し、寺子屋・郷学・私塾・藩校など既存の教育システムとは異なる視野と方法を獲得した。それは、日常や社会、政治への笑いを伴う深い関心であり、新たな世界を創造する共同作業でもあったのである。